



2021年度 日本海中部ブリ長期漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所が取りまとめた結果 －

今後の見通し(2021年11月～2022年3月)のポイント

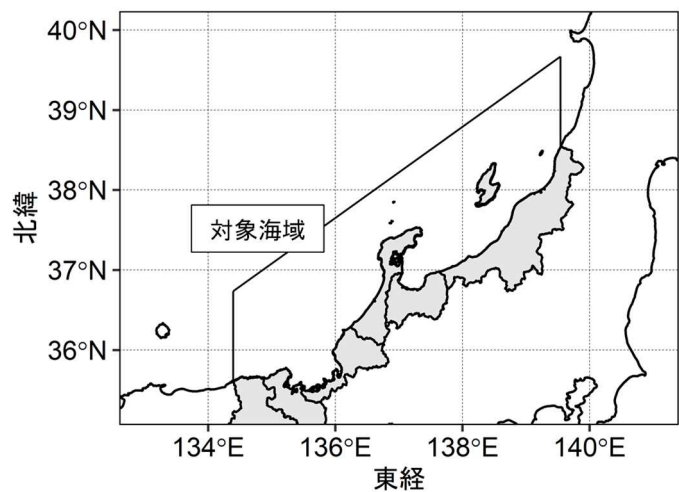
漁況(来遊量)

0歳魚は前年並み

2歳以上魚は前年並～上回る

* 「前年」は2020年11月～2021年3月

* 対象漁業は定置網



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当：企画調整部門(横浜) 森永

浮魚資源部(横浜、新潟) 大島、古川

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease>

2021年度 日本海中部ブリ長期漁況予報

今後の見通し（2021年11月～2022年3月）

対象魚種：ブリ

対象海域：日本海中部（新潟県～兵庫県）

対象漁業：定置網

対象魚群：0歳魚（2021年級群）、2歳以上（2019年級以上）。

・来遊量

0歳魚（2021年級群）：前年並

2歳（2019年級群）以上魚：前年並～上回る

* 「前年」は2020年11月～2021年3月。

* 予測期間における漁獲量が少ない1歳魚は、予測対象から除外する。

1. 資源状態

ブリは日本海、東シナ海、太平洋等を含む我国周辺を主な分布域とする回遊魚で、全国の都道府県沿岸で漁獲されている。資源量は1994年以降推定されており、1994年～2008年で113千～183千トンで推移し、2009年以降増加傾向となり2017年に過去最高の316千トンとなった。以降減少傾向となり、2018年は276千トン、2019年は287千トンであった。

全国でのブリの漁獲量*1は、1950～1970年代中盤には38千～55千トン、1970年代終盤～1980年代には漸減して27千～45千トン、1990年代には増加して43千～62千トン、2000年代にはさらに増加して51千～78千トンとなった。2014年には過去最高の125千トンとなり、2020年で105千トンであった。

2. 漁況の経過（図1）

兵庫県～新潟県の主要定置網の年間漁獲量は、2000年～2020年において5,000～12,200トンで、2014年（11,000トン）以降は2018年（5,300トン）まで毎年減少を続けていたが、2019年は8,300トン、2020年は8,000トンとなっていた。2021年1月～9月の漁獲量は3,100トンで、前年同期（5,400トン）の56%、過去5年（2016年～2020年）平均（4,900トン）の63%であった。

2021年の年齢別の漁況経過をみると、0歳魚の漁獲量（7月～9月）は500トンで、前年同期（400トン）の116%、過去5年平均（900トン）の57%であった。1歳魚の漁獲量（4月～9月）は1,000トンで、前年同期（2,500トン）の42%、過去5年平均（1,600トン）の62%であった。2歳（2019年級群）以上魚の漁獲量（4月～9月）は900トンで、前年同期（1,900トン）の46%、過去5年平均（1,700トン）の52%であった。

3. 今後の見通しの説明（図2、図3、図4）

(1) 0歳魚

予測対象海域における0歳魚は、7月から漁獲が始まり、例年では8月～翌年1月が盛漁期となっている。2021年7月～9月の0歳魚（2021年級群）の漁獲量は500トンで、同期の前年並み（400トン）で過去5年同期平均（900トン）を下回る漁獲量であった。本種0歳魚については、予報対象海域に加入した個体の多くが、予報期間中も同海域内に留まると考えられており、7月～9月の漁獲量が多いほど予報期間中の漁獲量が多くなる傾向がある。9月までの予測対象海域における漁獲量は、過去5年平均を下回るものであったが、前年同期も同様に漁獲量が少なく、前年同期並であったことから、今期の来遊は前年並と予測される。

(2) 2歳以上魚

予測対象海域における2歳以上魚の漁期は、5月をピークとする4月～7月、および12月～1月をピークとする11月～3月とがある。2021年4月～9月の2歳（2019年級群）以上魚の漁獲量は900トンで、前年同期（1,900トン）および過去5年同期平均（1,700トン）を下回った。

予測対象期間・海域においては、2歳以上魚のうち、産卵親魚と考えられる3歳以上魚が主な漁獲対象となっており、これまでの回遊履歴に関する調査研究から、近年では、太平洋側も含めた北海道周辺から、主産卵場と想定される東シナ海に向けて南下回遊する親魚群の一部が予測対象期間・海域に来遊すると考えられる。そ

のため、予測対象海域の4月～9月の漁獲量を指標として、予測対象期間（11月～3月）の来遊量を予測することは難しいと考えられる。その一方で、北海道周辺から日本海側への南下回遊と関連する環境情報として、津軽暖流勢力の指標値がある。この指標値は、深浦の沿岸水位から函館の沿岸水位を差し引いた、津軽海峡の沿岸水位差（津軽暖流の地衡流成分を想定）として算出している（東京湾平均海面準拠、気圧補正、潮汐除去、15日間平均；<http://www.jma.go.jp/bosai/map.html#5/34.488/137.021/&contents=tidelevel>）。同指標値の7月初旬～9月中旬の平均値と、予測海域における漁獲量との間で相関関係が確認されており、この相関関係から、今期の来遊は前年並～上回ると予測される。なお、同指標値と同漁獲量の間に関係がみられるメカニズムについては未解明な部分が多く、予測モデルの高精度化と合わせて、その解明が今後の研究課題となっている。

1歳魚（2020年級群）の予報対象海域における主漁期は4月～8月であり、予測期間での漁獲量の過去5年平均は100トン（範囲は70～300トン）と少ないため、予測対象から除外した。

*1 本資料においては、漁業・養殖業生産統計年報における「ぶり類」の漁獲量を全て「ブリ」単一魚種の漁獲量と見なして記述した。

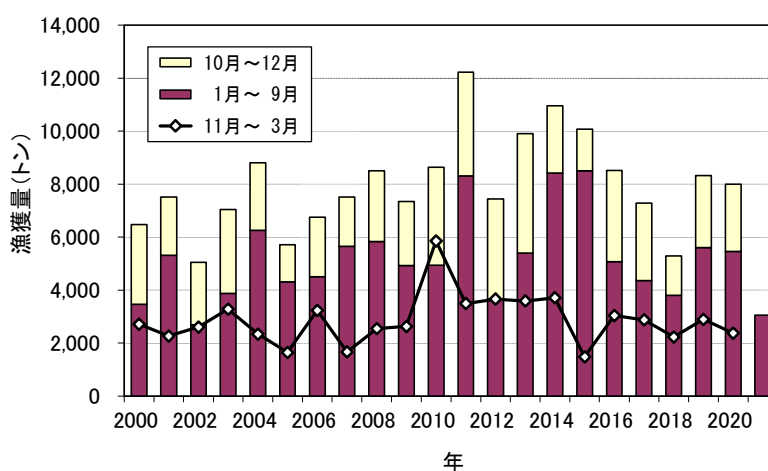


図1 兵庫県～新潟県の主要港におけるブリの定置網漁獲量の推移（2021年は9月まで）
折線は予報期間と同じ11月～翌年3月の合計。

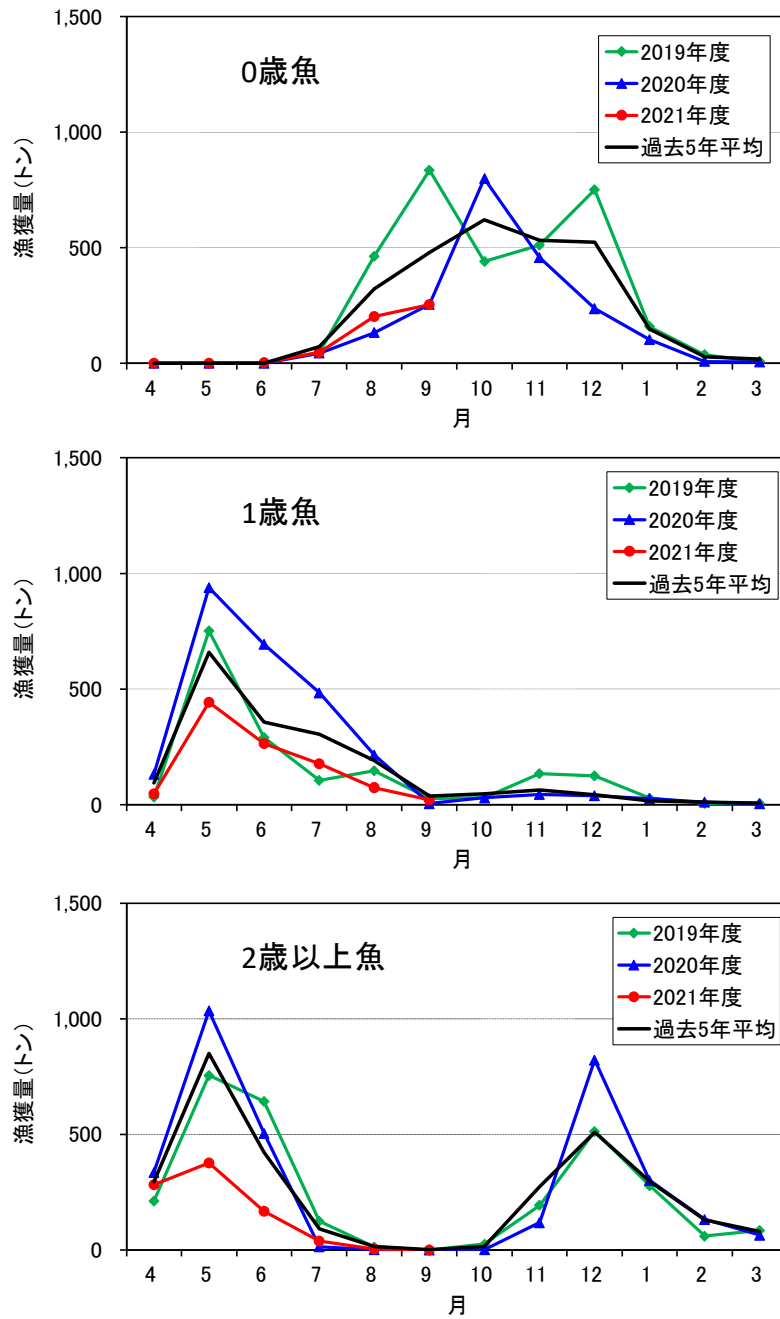


図2 2019年度～2021年度の兵庫県～新潟県におけるブリの定置網月別漁獲量の推移 (2021年度は9月まで)

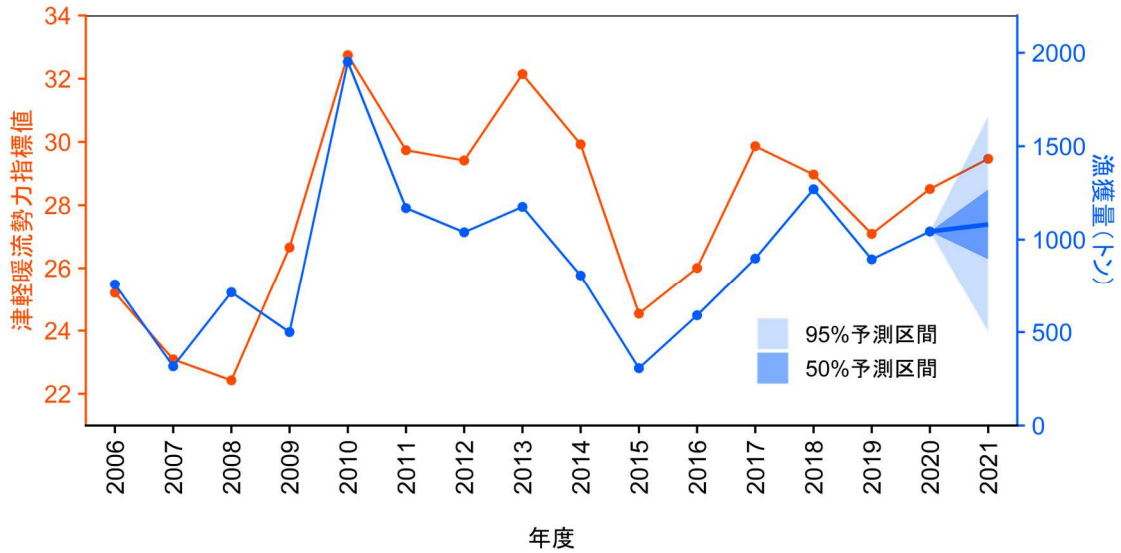


図3 津軽暖流勢力指標値と予報期間中の主要3県（新潟県、富山県、石川県）の3+歳漁獲量の推移、及び2021年度の予報期間中における漁獲量の予測区間

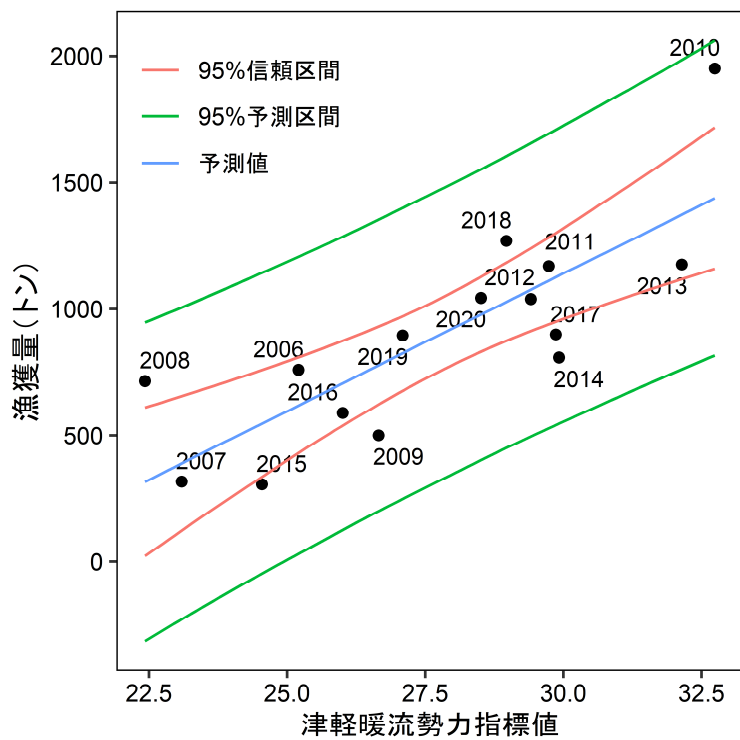


図4 7月1日～9月15日で平均化した津軽暖流勢力指標値と予報期間中の主要3県（新潟県、富山、石川）の3+歳漁獲量の関係（相関係数 $R=0.804$ 、平均平方二乗誤差 $RMSE=239.7$ ）。図中の数字は年度を示す。

参 画 機 関

<p>新潟県水産海洋研究所</p> <p>富山県農林水産総合技術センター 水産研究所</p> <p>石川県水産総合センター</p> <p>福井県水産試験場</p>	<p>京都府農林水産技術センター 海洋センター</p> <p>兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター</p> <p>(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所</p>
---	--